

生・老・病・死

017-006

人間は生老病死の四苦をもった存在である。
医学はそのうちの「病」のみを対象としてきた。
今日では、誕生、老、死の問題を避けては、医学は
成り立たなくなっている。
生老病死の全体が医学の問題である。

(池辺義教：医学を哲学する、p138、世界思想社、1996)

老と死

017-007

「そもそも自然はわれわれを安楽にさせるために
老年をもたらし、われわれを休息させるために
死をもたらすのである」
『莊子』

(金谷治訳注「莊子」第一分冊、p183、岩波文庫、1971年)

<死ぬ>とは

017-009

身体的・肉体的死：

それが動かなくなり、変質し始めていて、この変化は不可逆的である。

人格的死：

生きている者と全く関係を失い、没交渉となってしまう、その変化は不可逆的である。

(清水哲郎：生死のコントロール；医療現場に臨む哲学、p208,勁草社、東京、1997年)

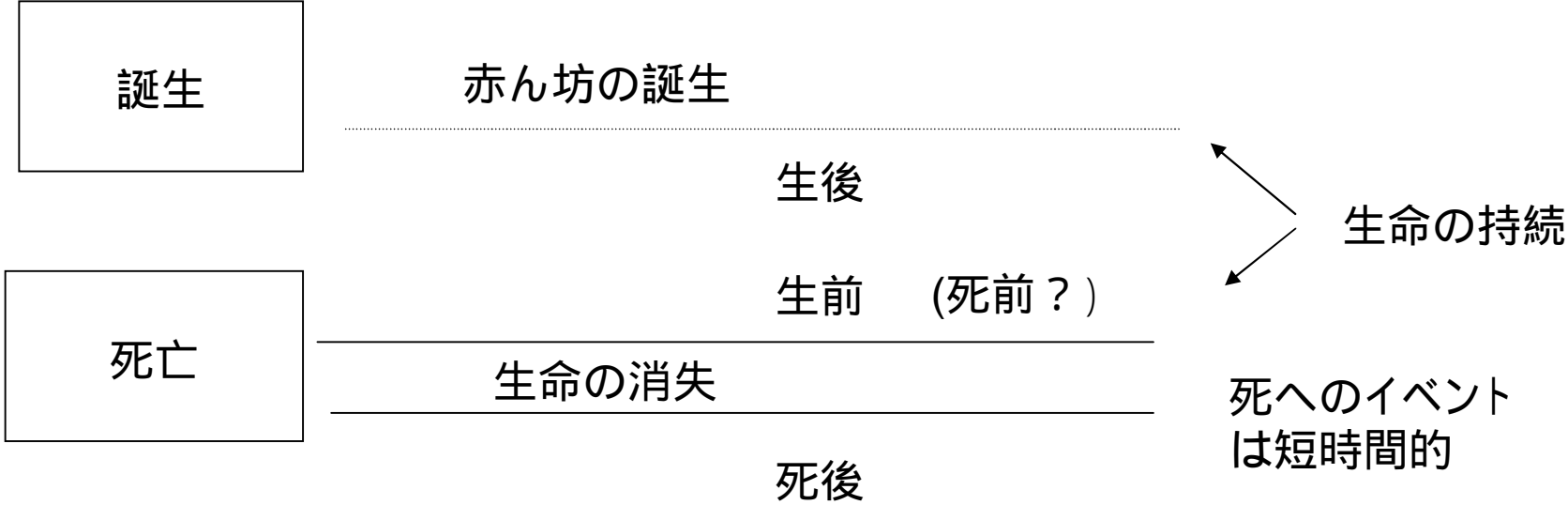
人間が簡単には死ねないようになっているのが、この平和と飽食と技術の時代である。長く生きることは現代のわれわれに課せられた一種の試練なのであり、一種の拷問とさえいいいい。

(木原武一：哲学からのメッセージ、p188、新潮社、1997年)

生と死は非対称的

生へのイベントは長時間的
 生命の出現 (出現しない。継続するだけ?) 胎生でも卵生でも
 (出現する。DNAが継続?)

赤ん坊は誕生するが、生命は誕生しない



(019 - 024)

死の起源

「**死**は、生命の外的条件に対する譲歩として**種に利益**をもたらす出来事とみなされるべきで、**生命そのもの**に本来固有の**必然的なものとみなされるべきではない**」(Weismann:The duration of life, p25, 1881)

不死の傷だらけの個体が生き延びるよりは、新たに完全な個体によって置き換えられる方が好ましい。。。それゆえ自然選択の作用によって、この想像上の不死の個体の生命は、種にとって無益である分だけ縮められる。Weismannは、**死は進化の過程で獲得したと主張する。**

(小川真理子:甦るダーウィン、p161、岩波書店、東京、2003年)

(019 - 025)

死は、多細胞生物が獲得

Weismannによると「体細胞と生殖細胞とが一致している単細胞生物に、死はない。分裂によって増殖する**単細胞生物は不死身**。。。多細胞生物の**生殖細胞**、すなわち生殖質だけは**不死身**。。。 (生殖質連続説)。多細胞生物の細胞の均質性は失われ、細胞の相対的位置関係の結果として分化が生じ、栄養を担うものと増殖に関与するものとの分業が生じる。分化が進むにつれ、新たな個体を生じる力は生殖細胞に限定されていく。」

(小川真理子:甦るダーウィン、p162、岩波書店、東京、2003年)

ダーウィンは種の起源を説明したのか？

(019 - 035)

ダーウィンは自分が種の起源や**生命そのものの起源の説明**をしているのだとは思ってもいない。多くの異なる種が多くの異なる能力を持ってすでに存在していることを前提に、中間からスタートしているのであって。。。必然的にすでに存在している種的能力を磨きあげ、多様化することになるのだと言っている。。。**適応の発生と多様性の発生**は、同じひとつの複雑な現象の相異なるアスペクトであり。。。それらを統一して洞察したものが**自然淘汰**という原理。。。自然淘汰は必ず適応を生み出すことになる。。。またダーウィンが論ずるところによれば、適切な環境の下で適応が積み重なれば種分化が生み出されることになる。。。。

(Dennett DC: Darwin's Dangerous Idea. Evolution and the Meaning of Life, Touchstone, 1996 (ダーウィンの危険な思想: 石川幹人ら訳。p58, 青土社、東京、2000))

(019 - 049)

米国人の進化論

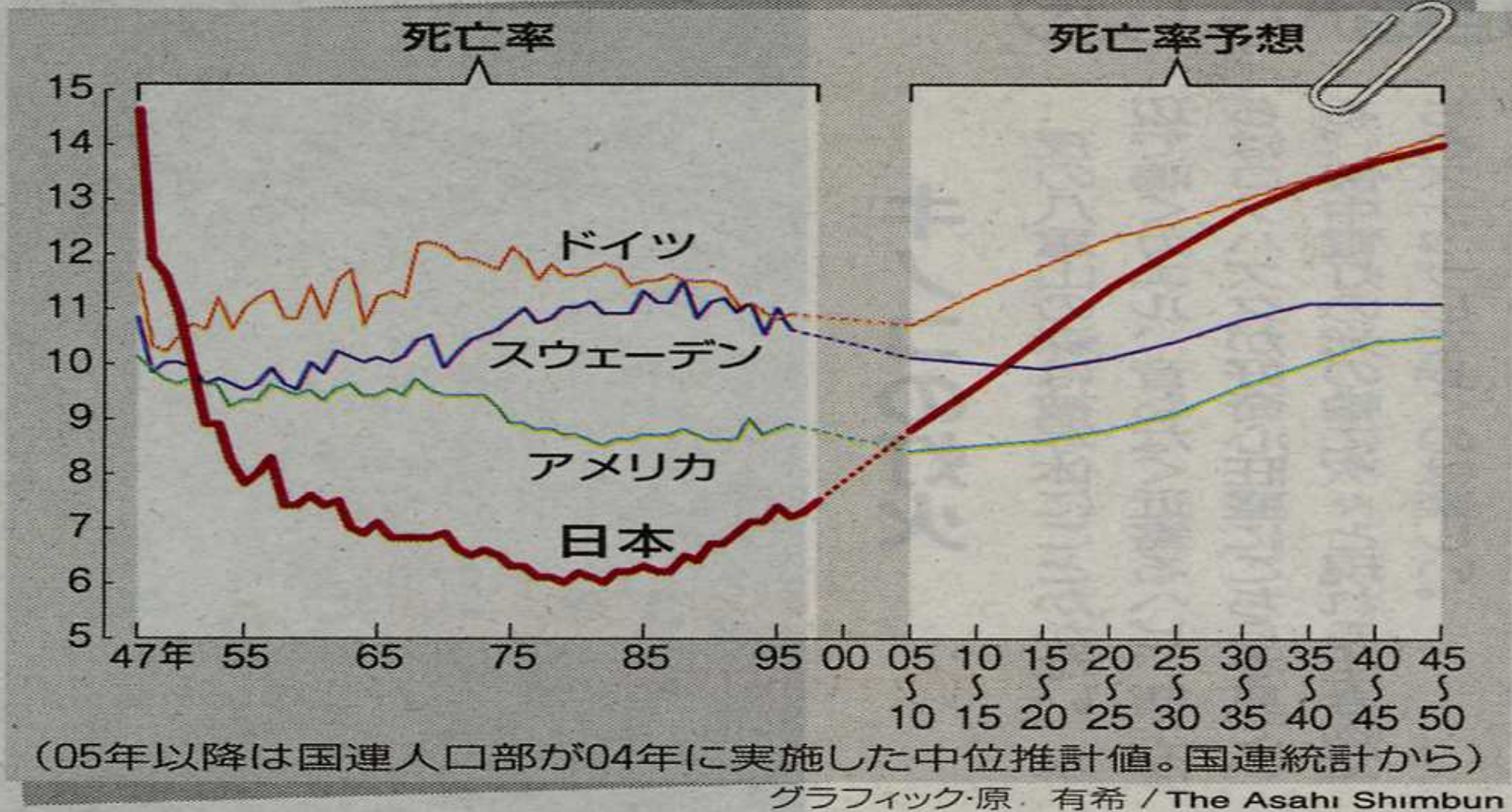
米国人は、進化論については正しく知らされていないと悪評が高い。最近のギャラップ世論調査(1993年6月)によって、成人米国人の47%が、ホモ・サピエンスはこの一万年以内に神によって創造されたと信じていることが明らかになった。

(Dennett DC: Darwin's Dangerous Idea. Evolution and the Meaning of Life, Touchstone, 1996

(ダーウィンの危険な思想: 石川幹人ら訳。p224, 青土社、東京、2000)

激変する日本の死亡率(人口1千人あたり)

(025 - 044)



日本は先進国で最も国民が死なない国。死亡率8.5/1000人(05年)。82年の6.0を底に上昇中。50年には、14前後になりドイツと並ぶ高死亡率国に。。。大量死亡時代は高齢者割合の増えるため。老衰での死亡はわずか2%。(朝日新聞2006年11月19日 be 1頁)

今週は、これでおしまい。

この続きは、また、こんど。。。。

(025 - 019)

人間の存在

デンマークの神学者Viggo Mortensenは、神学と科学の関係を論じた著書の中で人間の存在について、次のように要約している。

「太陽系のかたすみの、とりたててどうということのない惑星上での気まぐれなできごとから、特別な価値を持った生命が生まれてくるとは、とても考えられないし、またそのように考えるのはばかげたことだ」

(Jesper Hoffmeyer: En Snegl Pa Vejen; Betydningens naturhistorie, 1993

(松野孝一郎・高原美規訳: 生命記号論、p15、青土社、東京、2005年))

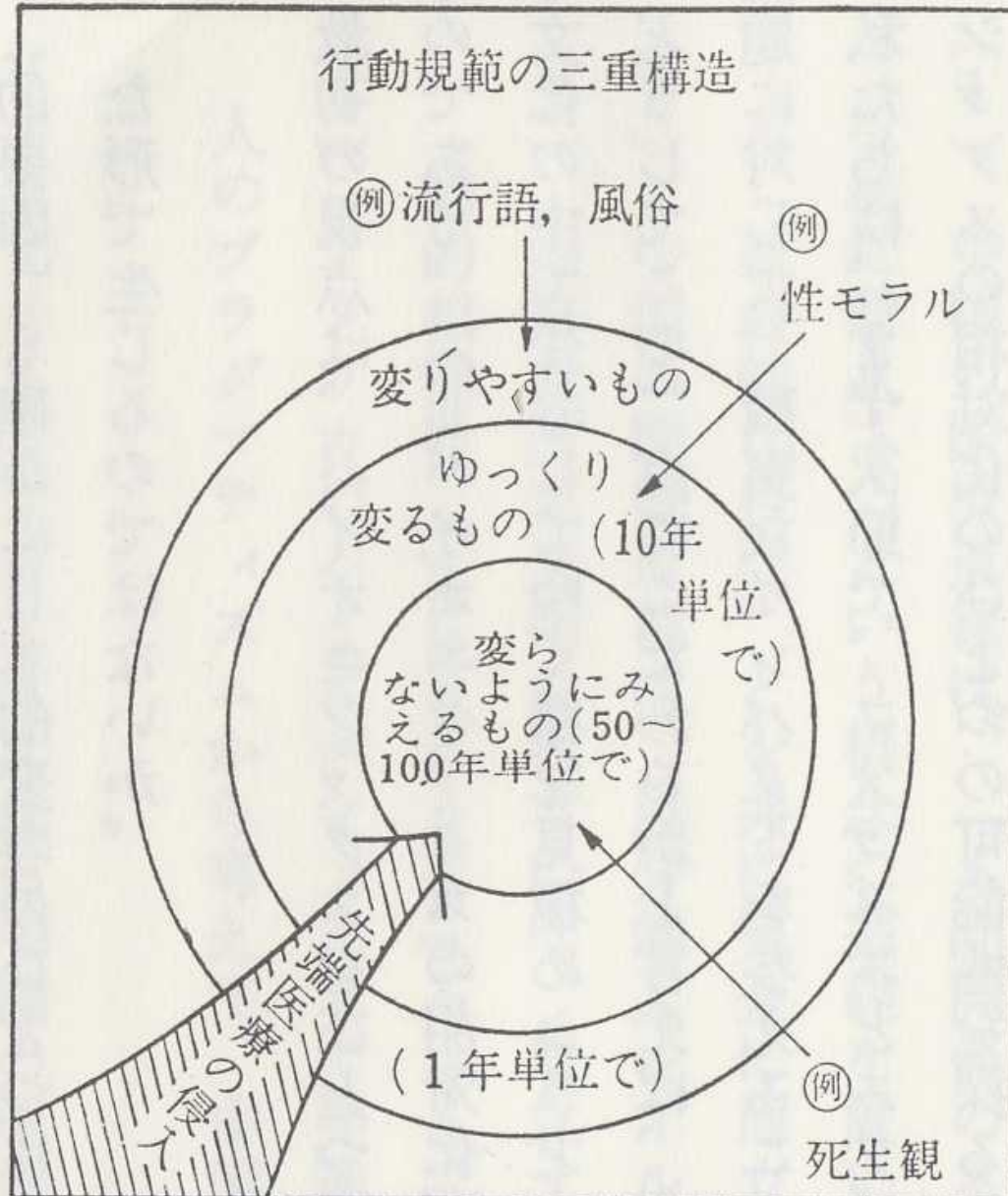
なぜ生まれ、なぜ死ぬのか

近代科学というのは「自分との」かかわりということを放棄することによって成立してきた知識体系である。。。

人間が生まれることや死ぬことについては、生物学的・医学的に説明可能である。

しかし「なぜ私は生まれてきたのか」「なぜ私は死なねばならないのか」と自分とのかかわりにおいて考えるとき、それについては科学は答えない。

行動規範の三重構造



米本*によれば「**文化の核心部分は極めて不寛容なもの**」であるので、「われわれ自身が本当はどのような生き方死に方を望んでいるかを探りだして明示的な形に整え、これをまっとうするために科学技術を受け入れるべきであり、結局それ以外の進行はありえまい」。すなわち、**文化的素地に合うような形に変容して、先端科学技術を受容すべき。**。。 (*米本昌平: バイオエシックス、講談社現代新書、p215、1985) (森岡正博: 生命学への招待、p143、勁草書房、東京、1988)

(米本、1986)

(022 - 027) 生命倫理における意思決定

- 日本の変容：人間関係の心情の学 -

アメリカでは理屈で割り切る議論が最終的に表に出てきやすい文化構造。。。日本では情に訴える発言が最終的に表に出てきやすい文化構造。。。

例えば、先端医療技術の導入について、アメリカであればしかるべき委員会が公聴会を開き、議論に議論を重ねた末、ある決定を下す。わが国の場合、そもそも議論が起きない。委員会で議論が行われることはまれであり、識者が自分の意見をただ述べるだけである。意思決定は、委員会の「コンセンサス」をマスコミに流して「待つ」ことで醸成される「国民のコンセンサス」によって。。。

cf：日本では強力な指導力は嫌われる

(森岡正博：生命学への招待、p162、勁草書房、東京、1988)

(022 - 029) 倫理的判断基準としての「自然」

さらに問わなければならないのは、**何をもって自然**とするかということである。。。植物人間を医学的技術において生かしつづけるが自然か、どこかで打ち切るのが自然か。致命的な肉体的欠陥をもった新生児を医学技術の総力を挙げて生かしつづけるのが自然か否か、さらに云えば他人の脳死を待つことを自然と容認へしうるか否か。

(相良亨:人命の尊重;理想, p158, 1985)

(022 - 030)

自然な形で解決

われわれ自身のなかで、「自然」であるかないかということはきわめて大きな判断の拠りどころ。。。われわれは、**自然に即す**ありようをよしとし、問題は自然な形で解決すべきだという思想伝統のうちに生きている。端的に言って、そこでは、個々の行為の是非を概念の論理関係で議論するやり方はなじまない。。。

cf：温和な日本的風土・自然に信頼感

(菅野覚明: 日本人とバイオエシックス; メディカル・ヒューマニティ、2(2):89,1987)

(022 - 031)

コンセンサスによる「自然」な意思決定

意思決定が自然に行われるためには、議論をしてはならない。議論は、対立と摩擦を生むばかりである。そうでなくて、私たちが共有している「共通感覚」「共通心情」へ狙いを定めて、「事実」を打ち込むのである。心情は理屈によってではなく、事実によって動かされる。この撃ち込み方に、巧拙が出る。事実に感応して、当事者のあるいは国民の共通心情がある方向へそろって動き始めたとき、コンセンサスが形成される。コンセンサス方式は＜事実の撃ち込み＞と＜雰囲気醸成＞の二面からなる。なぜ日本人がコンセンサス方式を重視するかというと、このような意思決定のやり方によってのみ、「自然」な意識決定が可能であると、私たちが感じているからに他ならない。Ref：阿吽の呼吸

(森岡正博：生命学への招待、p165、勁草書房、東京、1988)

(022 - 033)

「おのずから」に生きる

「おのずから」に生きる時には、まさに「おのずから」に事が成就するという一種のオプティミズムが、さまざまな仕方で流れているということ。。。

(加茂)真淵が最も主張したのは、天地の心のままに治めるときには、世の中が大過なく治まるということである。このオプティミズムは、一般的には、自然に徹して生きる時には、人間関係の和が実現するという仕方であらわれた。

cf：自ずから・自然(じねん)と

cf：日本の穏やかな自然環境風土

(相良亨:日本の自然。文学55(6):109,1987)

(022 - 036)

死の定義の階層構造

	死の概念	用語
レベル I	科学的事実としての死	脳死・心臓死・生理的に見た個体死
レベル II	哲学的レベルとしての死	人間の死
レベル III	法的レベルの死	法的に見た個体

(022 - 036)

科学的事実としての死とは、定義上、完全に科学的描写によって代置可能。

哲学的レベルの死は、「人間の死とは哲学的には何か」という問いに答えるもの。

法的レベルの死とは、法律で定められるべき人間の死であり、さまざまな現行法との整合性、それに法的な死の時刻の決定などが重要なポイントとなる。

(森岡正博:生命学への招待、p191、勁草書房、東京、1988)

(022 - 037)

科学的死と哲学的死

脳死が生理学的に見た個体死であるという判断は、科学的な判断であり、科学的事実として主張することは正当である。しかし「人間の死」であるか否かの判断は、**科学的事実としての死と哲学的レベルの死**の同定の問題、すなわち人間の死の哲学的定義の問題であり、「科学的である」とか「非科学的である」と形容することは権利上許されない。生理学的に見た個体死が、私たちが愛し、憎み、思いやり、気づかう全人格的存在としてのひとりの人間の死であるか否かという判断は、私たちの哲学的・道徳的判断なのであり、そもそも科学的でも非科学的でもない。科学とは何の関係もないレベル(すなわち**没科学的レベル**)での判断。。。

cf：哲学的多元主義

(森岡正博：生命学への招待、p198、勁草書房、東京、1988)